

廃墟の中の原点

——戦後帝大新聞史(1)——

河内光治

昭和五十八年十月五日受理

【要旨】昭和二十年八月十五日が無条件降伏の日から新しい日本の建設が始められたが、本郷の東京帝国大学の中で活動家達の最初の拠点となったのは、昭和十九年七月に全国の官公立大学新聞を統合して成立した『大学新聞』であった。ここから各分野に互る広汎な学生運動が一斉に芽吹いて行った。そして、昭和二十一年五月、二年間の休刊の後に、二十五年の伝統を持つ『帝国大学新聞』が再刊される。それは、正に焼野原と化していた東京という廃墟の中に立つ原点そのものであった。以後、昭和二十三年十二月の終刊まで、その歴史的意義を解明したい。

はじめに

筆者は、昭和十九年十月一日に東京帝国大学文学部国文学科に入学したのであるが、実はその一日前、即ち九月三十日に土浦海軍航空隊に、兵科第五期の予備学生として入隊していた。大学には休学願を出し、復員して二十一年四月に復学した。

そしてたまたま見た帝大新聞の再刊号で学生編集員を募集しているのを知り、これに応募した。課題の「現代の学生」という小論文と「初夏の東大」という感想文を提出すると、面接試験の通知が来たが食糧難のため帰郷していたので、八月に再上京した時改めて面接試験を受け、編集部に採用された。それから二年余り、昭和二十三年十二月の終刊号まで、帝大新聞に編集部員として参加した。この時期は連合

軍による占領時代で、新聞雑誌もG・H・Qの統制下にあった。従って、新聞紙上に現れない種々の状況もあり、殊に、終刊に至る経緯は、甚だ複雑微妙に錯綜して居り容易に解明できるものではないが、当事者の一員としてこれを客観的に記録しておく責務を感じ、その任に相応せぬことは重々承知しているが、敢えて稿を起こす次第である。幸い、関係者各位の御協力を得て、訂正補修して行き、できるだけ完全なものに近づければと思っている。以下文中、人名の下に（ ）を入れている者は、帝大新聞編集部出身を示し、出身高校、東大卒業年次・学部・学科を記している。

帝大新聞に限らず、敗戦後の混乱期に各分野で起こった学生の社会文化運動について、正確な記録を残さなければならぬとは、当時の常務理事だった桜井恒次氏（水戸、昭16・12・文・社会）が常々口にされ、

御自身も雄大な「戦後文化運動史」執筆の構想を持って居られたが、その一部として、筆者に「戦後帝大新聞史」を担当することを慫慂され、筆者も承知していたのであるが、桜井さんは昭和五十五年八月五日他界され、御期待に背いてしまった。すべて筆者の怠慢の故である。今漸く、起稿すること、ここに桜井さんに報告したい。それとともに既に故人となった金原元（府立、昭23・文・西洋史、昭和53・9・9没）、藤井松一（浦和、昭19・9・2工・航空、昭24・農・農経、昭55・10・6没）、小川峯雄（二高、昭22・二工・物理、昭56・6・3没）、清寺真（二高、昭24・医・医学、昭57・9・30没）の諸君にもお知らせしたいと思う。

なお、以下の文章においては、筆者の恩師先輩の方々にも登場して戴かなければならないが、客観的記述に統一するため、一切の敬称を省略させて戴きたいと思っている。甚だ心苦しいのであるが、御寛恕を乞いたい。

『帝国大学新聞』略史

本稿は、戦後再刊された『帝国大学新聞』の歴史的意義を説明することがその主目的であるが、先ず順序として、戦前の帝大新聞について、大よそのことを記しておきたい。言うまでもなく、戦後再刊された帝大新聞は、戦前の帝大新聞の進歩的伝統、批判精神を正しく継承しようとしたものだからである。

それから、戦争末期、帝大新聞が休刊させられた後、全国の官公立大学新聞を統合して発刊された『大学新聞』についても、やや詳しく記しておきたい。これは敗戦後も発行され、昭和二十一年五月の帝大新聞再刊の土台となったものだからである。

なお、これらについては、次に掲げる資料を参考とさせて戴いた。改めて御礼申し上げる。

◇『帝国大学新聞』994号（昭21・8・27）

座談会「学生運動を語る1」出席者・菊川忠雄（二高、大15・経・経済）、

岡倉古志郎（武蔵、昭11・経・経済）、扇谷正造（二高、昭10・文・国文）、

桜井恒次、紙上参加・伊藤好道（二高、大14・法・政治、昭3・経・経

済）、野沢隆一（二高、昭2・経・商業）、殿木圭一（東京、昭7・経・経

済）

◇『帝国大学新聞』1000号（昭21・10・16）「千号記念特輯号」

記事「本紙25年史」

◇『東京大学新聞』1730号（昭40・10・11）「四十五周年記念特集号」

奥山信一（二高、大13・法・政治）「創立当時、私は常に渦中にいた」

記事「東大新聞四十五年の歩み」

◇『東京大学新聞』1910号（昭44・12・1）「創刊五十年記念特集号」

座談会「東大新聞五十年の歩み（戦前篇）自由主義の牙城としての

帝大新聞」出席者・永井了吉（二高、大9・工・土木）、野沢隆一、殿

木圭一、扇谷正造、橋本正邦（二高、昭15・文・英文）

座談会〔戦中・戦後篇〕激動の時代を経験して」出席者・桜井恒次、

長谷川泉（一高、昭17・9・文・国文）、松下圭一、天野勝文

◇『桜井恒次』（昭56・8、桜井恒次遺稿集編集委員会（代表長谷川泉）編集刊

行）の中の諸氏の寄稿文

『帝国大学新聞』が創刊されたのは大正九年十二月二十五日で、創刊号はタブロイド型二十頁、第一面にミケランジェロの「天地創造」（シスチナの礼拝堂の壁画）の写真版（部分）を載せ、新聞というより雑誌に近い内容であり、月二回、半月刊の予定であったが、当分は月一回の発行であった。定価は一部二十銭、約一万部を印刷した。

そもそもはボート部から出た話で、大正八年に早稲田大学と始めて対抗戦を行い、その時全学クルーを編成したのがきっかけとなった。それまでは、法科、医科、工科、文科、理科、農科の六つの分科大学が集まって東京帝国大学を形成していた。それが、大正八年四月「帝国大学令」が施行されて学部編成に変わり、法科の中にあった経済学科等が独立して経済学部を作り、七学部で構成されることになったのであるが、まだ分科大学の色彩が強く残り、各学部間の交流も少なく、学生は孤立的であった。そこに全学クルーが編成され、対抗試合のために全学的な応援団も生まれたことから、各学部の学生代表が集まって学生会議が作られ、そこで全学的な学生新聞を出そうということになったのである。

廃墟の中の原点（河内光治）

然し、実際はこの学生会議は立ち枯れ状態となり、結局は、ボート部の先輩でその夏卒業して内務省に勤めていた永井了吉が中心となって新聞発行の計画が進められた。永井は、ボート部の先輩で出版社を営んでいた久保勘三郎（一高、大4・文・英文）に頼んで編集を指導して貰うことにし、予約購読者を集めなければと、学生会の会員（約二万名）に往復葉書を出して購読を呼び掛けたところ、約三千名から申し込みを受けたので自信を得、医学部の助手をしていたボート部の先輩の東龍太郎（一高、大7・医・医学）に頼み、母親から三千円を借用して貰ったり、自分は勿論、友人などから集めたりして資金を用意した。ところが、学内の教員や職員の間にも新聞を出すことに猛烈な反対があったため、学内に事務所を置くことができなくなった。そこで山川健次郎総長に相談したところ、「今は構内に部屋を貸すことはできないから外でやれ。俺は賛成だからしっかりやれ」と言われ、正門前のレストラン「バラダイス」の二階を編集室とすることになった。そこにボート部を中心に運動部の学生や先輩が集まり、久保の指導の下に編集が進められ、漸く十二月に創刊というところに漕ぎつけたわけである。

「発刊の辞」には、

東京帝国大学に属する四千の学生を中心として、之を縦に又横に貫く一の社会が、常に其必要を感じつつ而も未だ之を有するに至らざりしは（中略）。其結果として甲の学部には属するものは乙の学部

に何事の起れるかを知らざるのみならず、自己の学部に於て為されつつある事をすら完全に又敏速に知る事を得ず。(中略)我等同人は此新聞を発刊することに依り、我々が知らんと欲し、又知らざるべからざる大学の出来事を能う限り正確に又敏速に報道することを第一の眼目とす。(下略)

と書かれてある。第9号では、「本紙の主義綱領を明らかにす」と題し、一、大学の現実化(学制の改革、綜合大学の實現、評議會教授会の公開)、二、大学の経済的改善(消費組合の設立、寄宿寮の建設)、三、運動競技の奨励及び一般化(選手制度の改善、運動設備の充実)を提唱している。

翌大正十年十二月に、恐らく総長の意を受けてであろうが、学生監(学生課長の旧職名)の世話で、事務所を大学構内の南門巡視詰所(後に第一学生集会所)に移すことができ、調度も整え、本格的な活動を始める。

大正十一年四月、第20号から二年生の奥山信一が編集に加わり、専従として活躍する。奥山は、永井の了解を得て、新聞の大きさをタブロイド型から普通のブラケット型に変え、印刷所も日刊新聞の「大勢新聞社」(後に「朝日新聞社」)に頼むことにする。これは広告の關係で、日刊新聞用の広告紙型を使って拡充を図ったのである。タブロイド型だと帝大新聞だけのために、別の広告原稿を作らなければならず、出版社によってはそのために広告を出さないところもあったから

である。

事務所も学友会室に移し、学友会常務委員も編集に参加し、専任編集員も補充し、出入商人の暴利不正や付属病院入院案内業者の跋扈などを勇敢に突いたが、経営は苦しく、六月に、各学部教授を含む学生、先輩七十名で「東京帝国大学新聞会」を作り、発行権と交換に、大学当局から五千円の資金導入を受ける。これに対し、新聞の編集部はスクラムを組んで抵抗し、新聞の御用新聞化、官報化に反対した。大正十二年三月、奥山は卒業準備のため、後を同窓の鈴木東民(三高、大9・経・経済)に委ね、一時新聞を離れる。

大正十二年の四月には、各高校の活動家達が入学して新人会に加わり、会員はそれまでの十四、五名から一挙に五十名近くの大勢力になる。これは前年秋、志賀義雄、黒田寿男、伊藤好道等新人会のメンバーが各高校を遊説して廻った結果で、後藤寿夫、菊川忠雄等がいた。そして、その働きかけもあって、五月五日に始めての全学学生大会が開かれ学生委員会が結成される。

そのいきさつは、座談会での永井の回想によれば、学生大会を開くため五月祭を計画し沢田正二郎の新国劇を呼んで学生を集めたことになっているが、始めて五月祭が行われた大正十二年のこの日は、午前中は各学部の一般解放、午後は教員、学生、先輩による御殿下グラウンドでの大園遊会が中心で、沢正の野外劇が人気を呼んだのは大正十四年の五月二日である(帝大新聞、昭21・5・21「五月祭変遷のあと」)。然し、

細部はとも角として、この日に始めて全学学生大会が開かれたことは事実である。学生大会は、運動部と新人会の意見の対立があつて難行するが、帝大新聞編集部は久富達夫（一高、大11・工・造兵、大14・法・政治）が動議を出し、新人会の提案を全部容れる形で、学生の自治を要求する決議案が可決され、学生委員会が作られることになる。その決議の中に、「大学新聞を学生の手に」という一項があり、新設された学生委員会の中から各学部代表七名が選出されて新聞委員会が構成される。これに従い、前年作られた「新聞会」は解散し、新聞の編集発行は新聞委員会に移譲される。それとともに、創刊以来経営の責任者であつた永井了吉が手を引くことになり、鈴木も朝日新聞に入社するので、久富等に説得され、奥山が新聞に戻り、主任として永井の後を継ぐことになる。初代の新聞部の部長には、法学部の鳩山秀夫教授が就任した。

九月一日の大震災の時は、海洋研究会という名称で、新聞の編集部を含め学生委員会や運動部の学生約五十名が海軍の特務艦「神威」に乗り南洋航海をしていたが、八丈島あたりでこれを聞き、三日に横須賀から芝浦に廻って上陸した。歩いて本郷に帰り、まだ燃えている大学の構内で直ちに学生を集めて組織し、避難していた約十万人の罹災者の救援活動を開始した。その後、上野公園に避難していた約二十万人の罹災者も対象にして、東大に救助本部が作られる。帝大新聞もそれに加わり、印刷所が焼けたので本紙は二ヵ月休刊したが、ガリ版刷

りの号外を二回発行し、記録の整理などに当たった。

大正十三年三月、卒業を前にした奥山は鳩山部長に呼ばれ、卒業後も責任者として新聞に残ることになる。四月、学友会が改組し、新聞部が新聞の発行体となる。奥山は、読者を、先輩、在学生のほか高校生にまで拡げ、社内の仕事の分担も編集、営業と分けて以後の新聞社の形態の基礎を作る。経営は漸く軌道に乗り、五月からは週刊四頁建てとなる。その頃は学内の勢力を反映して編集部員も半数以上が新人会員であつたので、編集方針については常に激論が闘わされたが、次第に、何物にも拘束されないすべてから独立した進歩的姿勢という根本方針が確立されて行く。十二月には第100号を発行し、創刊四周年を記念して萬国新聞展を開催した。

大正十四年には六頁建てとなり、鳩山教授の辞任の後を受けて、新聞部長には法学部の美濃部達吉教授が就任する。十月には、五周年を記念して英文の国際付録を発行した。これは菊四倍版二十八頁の充実したもので、海外の各大学に日本の学界の近況を伝える役目を果たした。

ところが、昭和三年三月に学友会が解散する。これは大正十二年の学友会結成の時から「社会科学研究会」（新人会の母体である学内の学生団体）が学友会の一部として予算も分配されていたのであるが、これに右翼団体の七生社を始め運動部が文句を付け、結局、学友会は解散ということになってしまふ。運動部は独自の団体を作るが、新聞も

独立して、財団法人「帝国大学新聞社」を設立する。理事長は美濃部教授、理事は、経・河合栄治郎教授、文・吉田熊次教授、常務理事は奥山である。この年は三・一五事件があり、社研も解散させられるのであるが、帝大新聞としては、迂余曲折の創設期を終えて、安定した基礎に立つことができたと言えよう。

昭和四年には八頁建てになり、昭和五年には創刊十周年を迎えて内外新聞発達史資料展を開いた。この年、奥山が退き、毎日新聞に入っていた野沢隆一が常務理事を継ぐ。その前から常務理事は東大の学生課の嘱託も兼ねることになって居り、以後もこれは続く。編集長は、昭和三、四年・岡部一郎（七高、大15・文・社会、昭和五年は野沢が一時兼任しその後を、宮崎健蔵（五高、昭4・文・社会、昭和六年・築田銓次（静岡、昭6・経・経済）である。編集員も卒業すると、朝日、毎日、同盟などの大新聞通信社に入る者が多くなり、編集員の先輩の団体である「银杏クラブ」も次第にジャーナリズムの上で大きな勢力を持つことになる。

昭和六年からは春秋二回、読書特集号を発行するようになる。この年十月、吉田理事が辞任し、後任に文学部の戸田貞三教授が就任した。昭和七年に十頁建てとなる。昭和九年四月には出版部を設置し、『帝国大学年鑑』を刊行した。これは我が国で始めての学術年鑑であり、以後毎年刊行されることになる。単行本も『学制改革論』などを刊行した。

昭和十年になると、十二頁建ての紙面が確定され、発行部数は六万部に達し、帝大新聞の全盛期を迎える。東大内の学生新聞ではあるが、その経営規模、内容から見て、全国的な学術文化新聞に成長したのである。秋には600号、創刊十五周年を迎え、タブロイド型六十四頁の特集号を発行した。なおこの年、理事長が美濃部教授から戸田教授に変わり、理事に末弘巖太郎教授が就任した。

十二頁建ての内容は、一面が書籍広告、二面が記事、三面が論壇、四面が海外問題、五面が科学、六面が書評、七面が文芸、八面が高校欄、九面が大学欄、十面が芸術、十一面が学内記事、十二面がスポーツ欄である。編集長は、昭和七年から九年までが殿木圭一で、以後最上級生のうち一名が一年卒業を延ばして担当するという習慣が作られた。昭和十年・椎野力（五高、昭11・文・社会）、昭和十一・二年・石神清（七高、昭11・文・社会、昭和十三年・小西康孝（四高、昭13・文・社会）と続く。

然し、社会情勢は年毎に峻しく、ファシズムの波は東大にも押し寄せて来るが、帝大新聞は、もともと学内の学生新聞という建前であり、理事会にも東大教授が名を連ねて居り、執筆者も帝大教授が多かったことなどから、当時の情勢からすれば、破格とも言えるような言論の自由を得ていた。それを利用して編集方針は、大学の自治、学問の自由、真実の探求という批判精神が貫かれて行く。

昭和六年九月の満洲事変については、勃発直後に、横田喜三郎教授

の国際法違反であるという論文を載せている。昭和八年五月の京大滝川教授をめぐる京大事件の時には、『京都帝国大学新聞』と緊密な連絡を取り、毎週その詳細が報じられている。昭和十年三月には、美濃部教授が貴族院で行った「憲法学説弁蒙」を掲載し、昭和十一年二月の二・二六事件については河合教授の批判を載せた。河合教授は続けてファシズム批判を執筆している。

然し、昭和十一年十二月の矢内原事件から大学の危機は深刻となり、昭和十三年二月の大内・脇村・有沢の第二次人民戦線事件、昭和十四年一月の河合事件と悲報が続いて行く。帝大新聞はその度に、大学を去る教授の「終講の辞」を紙面に載せた。セツルメントも昭和十二年に解散させられ、学生消費組合も圧迫され続け、十四年に消滅する。銀杏並木の大本が一本ずつ切り倒されて行くような中で、帝大新聞はその孤塁を守って行く。戦局の激化の中で、最大の良心の府として、全国の学生知識人の拠りどころとなつて行ったのである。帝大新聞の論壇に論文を発表することが学者としての登龍門となり、他の欄も含め、帝大新聞に寄稿することは一つのステータス・シンボルとなつたのである。

昭和十三年、新聞社の組織の変更が行われ、理事会のほかに評議員会が新たに設けられることになり、各学部から教授が選出された。

又、この年、新聞用紙割当制が実施されて紙面は一挙に八頁に縮小を余儀なくされ、十五年には六頁、十七年には四頁になる。編集長は、

廃墟の中の原点（河内光治）

昭和十四年・橋本正邦、十五年・瓜生忠夫（三高、昭16・文・独文）、十六年・桜井恒次、十七年・松平哲（台北、昭17・文・社会）と続くが、松平は病気のためすぐ長谷川泉に変わる。桜井は繰り上げて十六年十二月に卒業し、二月に入隊するが即日帰郷となり、昭和十七年四月から、野沢隆一を継いで帝大新聞社の常務理事となる。長谷川は九月に繰り上げ卒業し、十月に入隊する。十八年になると十月二日の文科系徴兵猶予停止の勅令により編集部員も入隊する者が相欠ぎ、十七年に入社した加藤寛（山形、昭22・農・農経）も十八年十一月に入隊した。

昭和十九年五月、全面的な新聞雑誌の統合計画のため用紙の割り当てが停止され、帝大新聞は無期休刊となる。紙齢93号であった。

『大学新聞』時代

昭和十九年七月、財団法人大学新聞社が発足し、七月一日から旬刊で『大学新聞』が刊行される。三月の京大新聞、五月の帝大新聞を最後に、全国の大学新聞がすべて休刊を余儀なくされたため、これを一紙に統合すればということで、帝大新聞の戸田理事長、当時情報局長をしていた久富達夫の努力によって用紙の割り当てを正式に受けることができることになり、京大新聞の経営者入山雄一にも相談して設立される。東大に本社、京大に関西支社を置き、出陣・動員学徒以外は原則として個人の直接購読は受け付けず、京大に二千部、阪大に二

百部、神戸大に六百部というふうに各大学に配布数を割り当てることになった。

然し、実際は旧帝大新聞が主体となるよりほかに方法はなく、事務所も帝大新聞社をそのまま使い、役員も全員帝大新聞から出すことになる。理事長は戸田貞三、常務理事は桜井恒次、編集長は十九年二月に除隊になり新聞に戻った長谷川泉、である。編集部員は殆ど入隊していたので、大学に残っていた文学部の助手副手の平岡昇、猪股庄八、柳沢三郎などの応援を求め、更に新聞社の女子職員まで動員して編集を続けて行く。京大にも編集員が置かれ、通信が送られて来る。定価は一部十銭（送料三銭）であったが、敗戦後の二十年九月の38号から二頁十五銭、四頁二十銭に、更に二十一年一月の48号から二頁二十銭、四頁三十銭（送料五銭）に値上げされる。

第一号の一面には社説として「学生新聞の新使命」が戸田貞三の署名入りで載っているが、その中で、学生新聞が歴史的に学生社会運動の一環として存在して来たことが説かれている。勿論、「創刊の辞」その他、決戦下の学徒新聞として、当局の指導の徹底を図り、紙面もその線で作られているが、その中でも、編集の意図の汲み取れるものが所々にある。

旬刊で四頁建て、一面は総合記事、二面は署名入りの論説、三面上半分が各大学の通信欄、下半分が文化科学欄、四面は書評、課外講座、学界時評等である。三面に随筆、四面に科学随想の囲み欄も設け

られているが、筆者には、湯川秀樹、渡辺一夫、杉捷夫、土井晚翠などが続いている。紙面は十六段組みで、一、四面は下三段、二、三面は下二段が八つ割りの書籍広告である。

八月一日の4号に、「陣歿学徒（卒業生を含む）の手記」並びに「出陣学徒の手記」の特集を日本放送協会との提携の下に行うので協力願いたい旨の社告が載っている。「陣歿学徒の手記」は、先ず5号（8・21）の三面に、八名の日記、書簡の特集となって出ている。この頁には、「学徒出陣」と題する須田国太郎、「学徒兵に題す」という佐藤敬の絵が使われている。須田のは京大の学徒出陣の壮行会の情景、佐藤のは学徒航空兵が拳手敬礼している図柄である。そして、九月十一日の7号に「出陣学徒陣中の手記」が特集されている。

9号（10・1）の社説は、「新入学生諸君に訴う」と題した法学部長・本社理事末広巖太郎の署名入りのものである。筆者もこの時入学したわけであるが、入学式の記事では、新入生各科「計一、七六八名で此法文経で出陣中の学徒〇〇名」と書かれてある。既に徴兵年齢は満十九歳に下げられていたから、法文経の学生の殆どは出陣中であった。

12号（11・1）の三面に、「陣歿学徒の手記」の第二回特集が、吉岡堅二の「基地にて」の絵を入れて載る。15号（12・1）は、学徒出陣一周年記念号で、「学徒兵の手記」が三面に特集されて居り、四面は、「日夜敢闘する出陣・出動の学徒に贈る」と傍題された佐藤春夫作の「ジャカルタ日記抄」、又は、園大尉という人」で埋められている。

購読については、戦局の激化に伴い学校割り当てでは動員生徒に行き渡らないため、14号(11・21)に社告を出し、直接購読を受け付けることになる。

昭和二十年は一月一日の17号から始まる。一面は「捷春に贈る、非常生産態勢の課題」の特集、二面は「人文自然学界の回顧と展望」、三一面は「学徒出身の青年航空将校座談会」、四一面は「捷春随筆、決戦に想う」と題し、東龍太郎、高木市之助、辰野隆等の随筆、荻須高德の「オポー祭の日」という蒙古の人物画、海老原喜之助の「南熱回帰——従軍スケッチ帳より」と題する絵と文などで構成されている。

その後24号(3・21)の二面には、三月十八日に閣議決定し情報局と文部省から発表された「決戦教育措置要綱」に従い、国民学校高等科から大学にいたる全学校は一年間授業を停止し、「本土戦場化に伴う血戦施策」として「徹底的な戦闘配置につく」ことが報じられている。これは三月十日の東京大空襲に対したもので、その記事の上段には、その時、救援学生隊が結成され罹災者の援護に活躍したことが生々しい四枚の写真を添えて載っている。そして二面のトップの社説は、「盲爆下の学徒」と題してこれらの状況に触れ、授業停止の措置を「ドサクサ仕事」と呼んで「政治の貧困」を指摘し、

我々は今一度世界的連関において今次大東亜戦の真意義、性格を把握すると共に今日までへの現実的發展過程に対し冷眼熱腸良く再省を加えて我々に課せられた世界史的使命と責務に勇奮

すべきである。

と書かれてある。これは無署名であるが、桜井恒次のもので、座談会の中の、

三月十日の空襲の時に、これは私は引っぱられたんだけど、「もう戦争やめろ」という論説を書いた。もう焼けだされて私もカンカンになってるわけだから。それは引っかけたけど、もう発行しちゃってるので、問題になりませんでした。

という発言に照応する。

四月十一日に25号が出るが、これから二頁となり、広告も多くて両端の突き出しと記事中の三つぐらいになる。次の26号には広告は一つもない。空襲の激化の故で、「防空講座」が連載されている。それでも合併号はあるが旬刊を守り、八月十一日の35号の後、八月二十一日の36号は、終戦の詔書を一面上段に掲げ、「玉音拝し血涙滂沱、東大・大講堂で厳粛な誓」と当日の模様を伝え、「学徒よ重大使命を自覚、明日の皇国に生きん、冷眼熱腸その本分に邁進」と四段抜きの見出しで叱咤激励している。社説も「承詔必謹の大道」と題し、「冷静沈着、一步一步難路を突破して行こう」と呼びかけている。この辺のことを桜井は、

八月十六日に、新聞が出ていますからね。その時の論説は中村哲さんでした。十五日に哲ちゃんが台北から引揚げてきて浪人していたんだけど、彼をカンズメにして書いてもらったんです。

と回想している。

この後も旬刊で、37号9・1(2)、38号9・11(2)、38号9・21(2)、40号10・1(4)、41号10・11(2)と定期に発行されているが()は頁数)、殆ど署名論文で埋められ、再建の道が手探りされている。それも、戦時中に引き続いての指導的発言と、新生への胎動的発言が入り交じっている状態である。主なものを列記すれば、

- 南原繁(法学部長)「戦後に於ける大学の使命」 37
- 戸田貞三(文学部長)「復興と高等教育の在り方」 37
- 松下正寿「保障占領と国際信義、その国際的意義」 37
- 田中耕太郎「道義国家」の新建設、言論界の責任と粛正」 38
- 前田文相と戸田学部長の一問一答「再建教育今後の方向——理系は一部整理、適材適所主義を採用、ピラミッド型の科学を」 38
- 高坂正顕「武力なき国民への課題、教育の目的と大学の使命」 39
- 内田祥三(総長)「黎明新国家の木鐸に、卒業証書授与告辞」 40
- 今井登志喜「聡明なる叡智を發揮せよ」 40
- 大河内一男「日本経済の復興と今後の社会政策」 40
- 土屋喬雄「大東亜戦の敗因を究明す、その社会科学的方法論」 40
- 伊藤好道「同、軍事費の異常膨脹40、異常なインフレの進行41」
- 矢部貞治「基本的人権の確立、新日本政治の在り方」 40
- 丸山幹治「議会政治今後の運営の焦点と課題」 40
- 黒田覚「国体観念の混迷を匡正」 41

などが前者であり、後者としては、

- 近藤康男「戦後農業政策の展望、農業機械化の基盤成熟」 37
- 中村哲「激動期の国内政治と新政策の方向」 38
- 岸本誠二郎「経済建設、糊塗的応急策を許さず」 38
- 鈴木義男「官僚制度の改革、権力行政から文化行政へ」 38
- 中野好夫「アメリカ民主主義の本質」 38
- 田上稜治「我国行政機構の改革、抜本塞源の処置を」 39
- 清水幾太郎「アメリカの合理精神について」 39
- 岡倉古志郎「完全雇傭」の実現へ、アメリカの戦後経済策」 39
- 「戦後体制再建への構想」金融財政・栗栖赳夫、インフレ・末永茂喜、国土計画・諸井貫一、世界秩序の方向・鈴木東民 39
- 三宅正一「真の大衆的地盤に立て、新政党の組織と性格」 40
- 「新日本文化の方向」放送・中沢道夫、文学・松村達雄、映画・瓜生忠夫、音楽・諸井三郎、美術・遠山孝 40
- 森戸辰男「生誕をまつ新無産政党の性格と社会的基盤」 41
- 長浜政寿「当面の官僚制度改革とその方向」 41
- などが挙げられよう。なお、次の42号(10・21)の二面は「文化国家再建の基礎課題」と総題して三つの論文を載せているが、それは、西谷啓治「無私の世界性に立つ道理、第二のルネッサンス・高き自己へ」、鈴木成高「解放的世界の理念へ、日本の新なる地位とその方向」、鈴木安蔵「旧観念の無反省を脱せよ、言論の自由確立と日本新政治」とい

うのである。然し、こういう曖昧な編集はこれが最後となる。

十月一日の40号の三面の下二段に社告が載っている。それは、「三年有余にわたる大東亜戦も遂に我が苦闘空しく降伏の形を以て終結をみるに至った。」と書き出され、「我らは深く過去の迷夢を一掃し大詔のまにまに文化的平和国家建設へ新たな第一歩を印さねばならぬ。」とし、途中で活字を大きくして、

我らは今この国家的大転換に直面し新たな視点に立つ時学生文化新聞の使命愈々重大なるを想う、今ここに想いを到す秋この新たな段階に即応し我等は編輯方針の全面的改革を行い今後自主的に我が文化昂揚のため総合的な学生文化新聞として再発足せん事を期するものである。文化国家の建設は大学学徒諸君の手によってこそ行われ得ると確信する。本紙は強力なるその文化的啓蒙運動に今後全力を挙げて挺身せんと覚悟するものである。

と書かれてある。桜井の回想によれば、それはこういうことである。

昭和二十年の九月九日、水戸の高校で旧制高校第一回のストライキがありました。この時にね、たまたまこの事件を契機にして学生運動がややおこりはじめた。それから徳田球一さんの出てくるその頃に、邱永漢君が、僕を戦犯だと、戦争中発行を続けたのはけしからんから我々にわたせと、それで僕は結構だ、僕はもう引退しましょうと。

その次に石島泰、井出洋、これは一高グループの秀才でみんな集つ

廃墟の中の原点（河内光治）

てくる。（中略）そしてその連中が九月十月に来て僕もつるし上げくつたし、お互いにディスカッションして、是非とも帝大新聞の伝統を守れと、それから長谷川さんを編集長に従来どおり選んだのです。

邱炳南（永漢の本名、一高、昭21・経・経済）は41号に「青年の火」を燃せ、日本の学生と中国の学生」を載せ、敗戦後も何の行動も起こさない日本の学生に、

青年の「火」を論理上のみでなく現実に復活して見せてくれ給え。主観的には疑惑を解消してしまいたいこの衝動に客観的な根拠を与えてくれ給え。即ち私は日本の学生と中国の学生という舞台に立って喧嘩を売ろうというのだ。誰か売られた喧嘩を買うものはいないか。

と威勢のいい啖呵を切っている。この文章を読めば、先の桜井の回想も、切迫した現実感を帯びて来る。

これに応えるように、各学部 of 学生有志によって十月二十七日に「社会科学研究会」の発会式が行われると42号は報じている。社研には邱炳南も参加しているし、会員の中から、田沼肇（武蔵、昭23・経・経済）、田添京二（武蔵、昭24・経・経済）が編集部に参加する。この社研発足に関連して44号（11・11）で、井出洋（一高、昭21・経・経済）と石島泰（一高・昭22・法・法律）が、「科学的認識と実践」について論戦を交じている。即ち、井出は「社会科学の立場について」と題し、石島は「社会

科学研究の限界」と題して書いている。実践を尊重しようとする立場は同じであるが、その方法論にニュアンスの違いがあり、その後の編集部内での二人の行き方を示唆している。これ等を読むと、当時の編集室における沸き立つような雰囲気、新しく生まれ出ようとするもののエネルギーの激しさが、手に取るようにわかるのである。

その前に十八年末に入隊した帝大新聞編集部員に加藤寛が九月末に新聞に戻って来ていた。加藤は、敗戦後の極度に窮乏している学生生活の実状を見て、特に食・住関係の打開を目指し、他大学の学生と連絡を取り、動員学徒援護会が敗戦後改名した文部省の外廓団体の勤労学徒援護会の中に、学生協議会を作り、これを運動の拠点とする。そして学内では、出身の農学部、学生協同組合の結成に動き出す。その仲間から、既に40号に「未来文明への道」という急進的な文章を投稿していた鈴木健二（府立、昭23・農・畜産）、春田俊郎（松本、昭21・農・林学）、田添信一（武蔵、昭22・農・林学）が編集部に参加する。

同じように復員して来た金原元（府立、昭23・文・西洋史）が父一郎のすすめで桜井を訪ねて来る。一郎は東大社会学科で桜井の先輩であり、旧知の間柄なので編集者志望の長男を桜井に預けたのである。金原は長谷川に紹介され、編集技術の指導を受ける。

更に、戦争中から全学会に出ていた医学部の太田怜（一高、昭22・医学）がやって来る。発足した「ソビエト文化研究会」から平田重明（静岡、昭22・法・法律）がやって来る。金原が、友人の宮本三郎（府立、昭22・

法・政治）を連れて来る。宮本は長谷川に小論文を書かされ、二十一年の四月から編集部に加わる。

この宮本までが、再刊するまでの『大学新聞』時代の編集部に出入りしていた学生達である。七人の侍ではないが、このようにして多彩な顔ぶれが、各方面から桜井の許に集まって来たのである。

帝大新聞社は、東大構内の彌生門から鉄門に下る道の、付属病院を挟んだ左側にある第二学生食堂の建物の一階にあった。入口を入ると正面に食堂に続く階段が左右にあるが、その左側の通路に沿った外側を占めていた。部屋は内側に弯曲して緩やかな弧状に配置され、入口に近い方から、事務室、発送室、会議室、編集室と続いていた。事務室には、明石功事務長以下職員が整然と机を並べて業務を処理していた。十坪ぐらいの広さの会議室には、通路側に写真部の暗室などが取っており、残りの細長く弯曲した部屋一杯に会議用の長机が置かれ、長谷川がその一劃を専有して原稿の整理に当たっていた。その隣の五坪ぐらいの部屋が応接室を兼ねた編集室で、窓際に桜井の机があった。ここは廊下から入ることができたので、桜井を訪ねて来る者が入れ替わり立ち替わりという状態で、人いきれと煙草の煙でいつもむんむんしていた。

先輩では、岡倉古志郎、杉浦民平（一高、昭11・文・国文）、花森安治（松江、昭12・文・美学）、瓜生忠夫。それに朝日の椎野力、毎日の沢開進（富山、昭14・文・独文）、共同の橋本正邦などが取材を兼ねて来る。

学内では、法・丸山真男、経・遠藤湘吉、安藤良雄、田代正夫、氏原正治郎、文・福武直、嘉門安雄、農・古島敏雄、東洋文化研・小口偉一など。

学外では、中村哲、内田義彦、下村正夫、青山敏夫、倉橋文雄、野間宏、三輪福松、共同の北村治久など。

これらの人々を集め、四十歳未満の研究実績のある者という条件で六十名が集まり、「青年文化会議」が結成されたのは昭和二十一年二月二日である。51号（2・11）にその記事があるが、会長・川島武宜、副会長・中村哲、書記長・瓜生忠夫という陣容で、当然、大学新聞の執筆グループともなっていた。

昭和二十年十月一日の40号の再出発言の後、十月二十一日の42号から一面が記事面として復活し、学内、他大学、文部省などのニュースが載り始める。広告も43号では、二面に『日本評論』『新生』などを入れた下二段八つ割りが復活し、47号から固定して行く。42号以下の発行月日、頁数を記すと、昭和二十年は、42号10・21(4)、43号11・1(2)、44号11・11(4)、45号11・21(2)、46号12・1(4)、47号12・11(2)であり、昭和二十一年は、48号1・1(4)、49号1・11(2)、50号2・1(4)、51号2・11(4)、52号2・21(4)、53号3・1(2)、54号3・11(2)、55号3・21(4)、56号4・1(4)、57号4・11(4)、58号4・21(2)（発行は57号と同時）である。以下、紙面からその主な動きを追ってみよう。

廃墟の中の原点（河内光治）

先ず人事。これは、マッカーサー総司令部の十月二十二日の「日本再教育に関する指令」、十月三十日の「軍国主義教育者排除に関する指令」の二指令によって急速に動き始める。この指令については44号に、津吉英男の「マ」指令を中心に、新文政の基調」という論文があり詳しく言及されている。

41号に「東大経済学部長に舞出教授再任」の記事がある。橋爪明男（学部長の辞任の後、舞出長五郎教授が、昭和十三―十五年に続いて再任されたのである）。

42号には、「東大経・休職教授ら復職か」、「田中（耕太郎）文部省学政局初代局長と一問一答、"立場は変わっても態度に変化なし"」（十月十五日発令）、「百武九大総長、新事態に辞任」（「九大総長に百武大将」〔23号・3・11〕、「平泉教授辞任」の記事。43号には、「文部省社会局長に関口泰氏（朝日新聞論説委員）」。

44号には、一面のトップに、「七自由主義教授・助教授一斉に帰る、東大経済の暗雲一掃」の見出しで、五日舞出学部長から発表された内容が載っている。予想されていた大内兵衛、矢内原忠雄、土屋喬雄、有沢広巳、脇村義太郎、木村健康の六氏に加え、昭和六年平野義太郎とともに大学を去った山田盛太郎も復帰し、代わって荒木光太郎、油木豊吉、中川友長が勇退、橋爪明男、難波田春夫が退職である。その記事に続いて大内の談話がある。大森義太郎、河合栄治郎が生きていたらという質問に、「河合、大森両君は悦んで大学に復帰したに違いない」

と答え、「ルネッサンスとレフォルマチオンを經ていない所では良心の自由というものがありません」、「大学の自治というものは矢張り絶対に護られねばならぬと考えます」などと明快に答え、「世界的水準の学問」を持つ大学の建設を熱っぽく語っている。

同号には更に、「京大事件で追放された四教授も帰る」と、京大で宮本英雄、滝川幸辰、恒藤恭、末川博の復職を黒田学部長が確約し文部省と接衝することになったとの記事があり、「速な軍国主義教授一掃へ」と、東産大、東北大、九大の動きも報ぜられている。また京大の羽田亨総長が辞任し、新たに就任した鳥飼利三郎総長の談話「責任ある自治を」も載っている。

次の45号には、十一月十九日に行われた大内、有沢講師（正式発令前なので）の復帰第一講が報ぜられ、山田、土屋講師は二十二日と予告されている。「東産大、大塚金之助氏帰る」の記事もある。続いて46号には、「十五年ぶりの教壇、山田盛太郎氏初講義」の記事があり、京大については、「復帰前提条件の実現、京大黒田法学部長再建の全貌を語る」と七教授の辞職、先の四氏に田村徳治を加えた五氏の復帰の構想が報ぜられ、これに関し鳥飼総長も「大学の自治は回復」と文相との会見の模様を語っている。更に、「九大に五氏（経・向坂逸郎・石浜知行・高橋正雄、法・佐々弘雄・今中次麿）復帰」があり、47号に「阪商大に名和統一・木村和三郎教授復帰」、55号に東北大で宇野弘蔵に続いて服部英太郎、東大農に近藤康男の復帰が報ぜられている。

46号に「東大内田総長辞意表明」があるが、47号に「懸案の東大総長交迭実現、南原法学部長に決定」の四段抜きの記事が出る。南原総長は、「学問の自由」の信念」とその手腕を期待されて登場する。就任後、翌年の一月二十三日に長谷川編集長が総長室で会見を行い、「学園と学問の復興、遠大な理想的・世界的大学を」という見出しで、その抱負をかたる談話を50号に載せている。因に、総長を含めた大学本部の担当は、戦前の帝大新聞の時から編集長と決められていたもので、これは再刊後も引き継がれる。この後、52号に「新日本文化の創造——紀元節に於ける演述」、56号に「東大戦歿並に殉職者慰霊祭・南原総長告文」、58号に「大学の理想——創立記念日における演述」の全文が掲載されている。

次は学生団体の動き。先ず41号の社説は「学生運動の出発点」と題し、戦前の学友会の在り方を反省し、今再組織されるべき学友会には次の四つの条件が絶対必要であるとする。

一、学友会は完全なる学生の自治機関とし、二、之をして言論発表の機関たらしむるが如き組織を整え、三、今後累増すべき生活の悪条件を解決するために従来疎外されていた共済組織、消費組織の増設をはかり、四、特に私学においては経営に対する批判機関を加える。

これに関しては43号に「全学会改組は明春」という記事が出る。東大では、昭和十六年に各学部会を総合して全学会を作り運営して来た

のであるが、その改組について委員会が十月二十日に開かれ、「学生の意向も参斟」して明春四月以降新体制で臨むことになったと報じている。然し、基本方針として、各学部会を復活するのか、新しく全学的な横断組織を作るのか未決定なので、「学生側の積極的な参加が期待される」としている。

昭和二十年の主な動きを見ると、42号に「東大社研生る」、「東工大、新学友会結成へ」。43号に「東産大、近く学生大会、社会科学研・法律学研生る」、「東大社研、浮浪者調査に着手」。45号に「東大社研、学生輿論調査を施行」、「天皇制」「神道」を問う、「東大経、学生大会」、「東産大、第一回学生大会」、「早大理工、学生大会」、「京都学生連盟を結成」、「東産大、社会科学研発足」、「一高に二研究会、文化科学・社会科学」、「法政大、学生大会」、「京大社会科学研生る」、「消費組合結成へ」、食生活打開に学園動く（東産大、東工大、岡山医大）、「中央大に英米法制研、社会科学研生る」。更に「東京学生有志がマ司令部と懇談」の記事もある。十一月七日、東大、早大、慶応、東産大、日大の学生有志が総司令部情報教育部の求めにより四項目の質問に答えたもので、戦犯教授の追放など学園の民主化、学生運動を阻む法令、学校内規の撤廃を求め、総司令部側はこれを諒解したと。46号には、「日大（医）、学生組合組織」、「京大、同学会改組へ、協議委員を選出」。47号には、「東大、社会哲学生生る」、「全京都学生同盟生る」。

昭和二十一年になると、総選挙を控えて民主統一戦線結成が叫ばれ、

それを反映して紙面も尖鋭化して行く。二月一日の50号の一面は、社説「民主主義統一戦線に就て」、トップ記事は、「学生運動新段階へ、民主革命の最先頭に、政治へも積極的に参加」の四段抜き、そして「鞏固なる学生統一組織へ」の見出しで当時の全国的状況を次のように総括している。

（民主戦線結成の）機運は既に東京に於ける都下学生連盟準備会、学生文化連盟、名古屋地区を中心とした中京学生連盟、京都を中心とした京都学生連盟、全京都学生同盟準備委員会、九州に於ける学生連盟等に於いて見られたところであるが、或るものはあまりに政党性に偏して健全な伸長をばまれ、又一方未だ各学園に自治組織が確立していない点も影響してその組織鞏固ならず、又各学園に対する発言権に於いて微弱なものがあつた。

記事は更に、「研究団体も積極参加」、「学生も民主統一戦線へ、学生は語る」などと続いている。

52号には、「学生の手で食生活打開、"学び得る"環境産む、学生食堂連合会設立へ」、「学生協議会生る、新聞・社研部会も結成」。54号には、「東大青共生る、四十名余に」、「東大農、学生の苦心酬わる、協同組合すべり出す」がある。

農学部協同組合は、全学消費組合の結成が遅れているため、農学部が独自に計画を進めて来たもので、食堂、寮、売店、図書室の建設を目標に掲げていたが、田無寮、文房具雑貨店、書籍店を設立、食

堂も三月下旬開設の見通しがついたため、二月二十二日学部長司会の下に教職員学生の学部集會が開かれ、定款が可決された。

セツルメントも動き始める。50号に「二村にセツル行く」の記事があり、その中心にいた石島が「セツルメント運動の新方向」を書いてゐる。そして53号に、「東大セツル愈々発足」と三月一日發會式が行われることが報じてある。

54号にはもう一つ、写真入り六段の囲み記事で、「本郷に「学生書房」、学生の手で学生のために」の記事がある。

学生の図書入手難は、学生自ら解決せよと、東大では法・文・経・農・医の各学部学生有志が去る二日大学新聞社に參集、之が具体策を協議した結果急速に具体化し、十一日から東大正門前旧「鉢の木」跡に「学生書房」が開店した。

「学生書房」は、前記各学生の手で之を経営し、「管理委員會」を作つて購入圖書の選択、学生への優先配給等を行う外、「学生讀書組合」を設けて、組合加入学生に対し種々の便宜を計る予定である。即ち学生ライブラリを作つて辞典、全集、絶版圖書等を備えて閲覧に供し、又新刊書籍等は優先的に申込に応じる外、高専生には読書指導を行う予定である。

と書かれ、金原の抱負を語る談話がついている。「鉢の木」跡は、買収した金原一郎医学雑誌株式会社社長から桜井に提供の申し出があつたもので、約一千冊の医学書も寄贈された。事実上は、桜井が理事長、

長谷川が顧問となり、大学新聞の編集部が中心となつて管理委員會を構成した。加藤、井手、石島、金原、田沼、春田、宮本である。運営が軌道に乗るにつれて管理委員會も拡大されて行くが、その中から故人となつた小川峯雄、藤井松吉が新聞の編集部に参加する。57号には、一カ月後の狀況が報告されている。それによると、四月四日の委員會（二十名）で、三月の利益金二千四百円の内、千円を東大内の七つの進歩的学生グループ（社研、社哲研、演劇研、青共、セツル、農協組、ソ文研）に寄付、千円を委員手当、四百円を事務費に当てる、将来は出版事業も行ふ、讀書組合の組織を整備する、ことが可決された。

この後のことになるが、出版について言えば、この年十一月に刊行された『立ちあがる人々』が始めてで、これは社研の行つた壕舎生活者及び浮浪者の実態調査の報告である。この社研の調査報告の概要は、49号の二面全頁に「壕舎生活者はどうしてるか、邱炳南記」、51号の四面に「浮浪者の実態をつく、薄信一記」として載っている。十月には関東社研連の協力の下に『学生評論』を再刊し、二十二年の四月、一周年記念として大塚久雄の『近代資本主義の系譜』を刊行する。その後も、川島武宜『日本社会の家族的構成』、古島敏雄『日本農業の封建性』など、注目を浴びた本を刊行した。

この大塚助教は青年文化會議の有力メンバーであつたが、栄養失調のため失明寸前であると44号の「学燈」欄が報じ、大学の無策ぶりを嘆いたのであるが、その反響について47号は、「乏しい学資で買出見

舞」と小佛峠に疎開療養中の同氏のところに連日学生教員から食糧藥品などが届けられ、「見えぬ眼に涙」と報じ、この問題を契機として、学生教職員の生活防衛のため、大学当局も消費組合の結成を企図している」と書いてある。

次に寄稿論文の主なもの。

今中次麿「民族協同体的国家の建設、今後の新国家原理」42

横田喜三郎「国際連合加入への心構え」42

滝川幸辰「大学の研究自由の確立」42

風早八十二「階級的独立性を確保せよ、労働階級の将来」42

宇野弘蔵「自小作形態検討の要、農業の『封建制』の究明」42

「国家改造論の方向」平野義太郎「人民」の手による憲法改正」

志賀義雄「徹底的な民主化を」46

高島善哉「新たな社会観の確立、啓蒙主義と歴史主義の結合」46

「新文化の胎動をみる」映画・岩崎昶、雑誌・瓜生忠夫、演劇・中村

翫右衛門、「ツーロン港」評・下村正夫、文学・滝崎安之助46

美濃部亮吉「日本経済の復興とインフレーション」47

羽仁五郎「文化の封建制について」48（これは全文ローマ字）

「日本経済の再編制」工業・平岡敏男、農地・栗原百寿、産業転換・

土屋清48

「学界の課題と展望」憲法・鈴木安蔵、史学・林健太郎、教育・石山修平48

具島兼三郎、加藤新平「民主革命途上の天皇制」50
佐藤功「憲法改正事業の現段階とその課題」50
「学界の回顧と展望」農業経済・古島敏雄、自然科学・武田栄一、経済学・内田義彦50

大河内一男「失業理論と失業対策」50、51、55、56

大内兵衛「当面のインフレ様相と解決策」51

飯塚浩二「日本民主主義の課題、東洋的社会と民主化」52

波多野乾一「中央政治力の發揮、中国統一化の開始」53

高橋幸八郎「朝鮮問題への視角、その歴史的展望」53

伊藤律「農業革命か地主的改革か」54

安藤良雄「生産再開の基礎条件」54

中村哲「憲法改正草案の論点」55

「新劇の胎動とその方向」土方与志、下村正夫、村山知義55

平野義太郎「憲法改正と今次議会の在り方」56

細川嘉六「民主人民戦線の即時結成」56

林健太郎「ヒューマニズムの歴史」56、57

武谷三男「文化としての科学」56

大塚久雄「近代的人間類型の創出、政治的主体の民衆的基盤の問題」

57

川島武宜「学問の幫間性と有関性、日本的学問精神と近代科学精神の対比」57

加藤周一「佛蘭西の左翼作家」57

40号で懸賞小説を募集し、期間は二十五日間しかなかったのに、「各大学教職員、学生を始め老若、男女各層の支援を得て多彩な佳篇を得ています」と六十二篇の応募のあったことが43号で報告され、当選小説は48号(1・1)の四面に掲載されている。滝山厚三作「内報」である。これは吹田順助のペンネームと言われる。

50号から「遮断機」が設けられている。これは再刊後の帝大新聞にも引き継がれる文化時評のコラム欄である。筆者と題名は、野間宏・永井荷風の近作50、黒木重徳・河上肇博士を偲ぶ51、杉浦民平・売笑婦的文化人!52、谷山徹・演劇の古典と新しさ55、本田正次・学園地区の構想56、である。

なお編集の特徴を幾つかあげる。

「日刊新聞評」がある。新聞と民主主義44、財閥解体の究明、読売争議と真正民主主義派45、食糧問題とその掘り下げ46、新聞と臨時議会48、国民に愛されるもの51。

次に、松浦健三(山形、昭2・文社会)による「日本学生運動史」(50・51・52)が逸早く連載されている。

そして、学制改革問題にも相当のスペースを割いている。「高校三年制を復活せよ」のキャンペーンには、40号に井口常雄、川口篤、剣木亨弘、下村海南、41号に末弘巖太郎、42号に安倍能成と動員している。又、瓜生忠夫は「学制改革への参考意見」を51号から55号まで五回連

載している。

四月十一日の57号には、学生生活協議会が九段の近衛師団の兵舎を学生寮にする運動を始めたことが大々的に報じられているし、青年文化会議の農村班(川島・古島・内田・中村・関島・野間・桜井)が三月二十二日から一週間、農村文化協会長野支部の招きで、文化講座を十四カ村で開いたことも報じている。前の56号にはこれと提携してセツルメントも学生六名を長野県の六町村に派遣したことが記事として出て居り、この号に石島の報告「信州農村巡回後記」が載っている。又、社研が学内で行った、戦争の原因、政党支持、戦災の有無等の輿論調査の報告もあり、「校内外食券食堂開く」と農協組食堂が開店し盛況であることが写真入りで報じられている。

そしてこの号の一面に、「終刊の辞」が載っている。これは、敗戦後の大混乱が一応の整地を終えたという認識の下に、いよいよ本格的な再建に踏み出そうというのである。この過渡期を支えて来た『大学新聞』は充分その使命を果たし、今や帝大新聞再刊への機は熟した。昭和二十一年の東大の入学式は五月一日が予定されているので、休刊以来満二年に当たるその日を期し『帝国大学新聞』が再刊されることになる。

こうして『大学新聞』は、戦争末期、敗戦直後の激変期の一年九カ月に五十八号を刊行し、終刊を迎えることになる。57号に『帝大新聞』

再刊の予告も載っている。そこには、大学新聞社からの申し入れにより定期購読者を帝大新聞が引き継ぐと書いてある。

京都でも、大学新聞関西支社のメンバーの間で京大新聞の復刊の動きがあり、こちらは一足早く四月一日に入山を中心に『学園新聞』の第一号が出る。これは単に京大新聞の復刊というのではなく、

今度全く新しい立場から関西一円の大学高専の学生を対象とした学園新聞が創刊されることになって嬉しく思っている。私の考えでは、これからの学生新聞は単に学生を対象とする許りではなく広く社会人に対しても高き指導性を持ち、学生の優れた点を社会に紹介する丈の意気込が欲しい(鳥飼利三郎「創刊に寄す」『学園新聞』

第1号、昭21・4・1)

と期待されたものである。学園新聞はよくこれに応え、粧いも新しく、京大新聞の先輩で復員して来た伊達得夫(後に書肆ユリイカを創設、昭36・1・16急逝)を編集長に迎え、ソフトでユニークな学生文化新聞の性格を打ち出して行く。旬刊で、発行部数は八千部から一万部、定価は三十銭であった。

『帝国大学新聞』の再刊

再刊の時の帝大新聞社の役員は次の通りである。財団法人の認可は昭和二十一年十一月十五日付である。

理事長	戸田 貞三 (東大文学部長)
常務理事	桜井 恒次
理事	宮沢 俊義 (東大法教授)
〃	東 龍太郎 (東大医教授)
〃	野沢 隆一 (全国印刷工業協同組合専務理事)
〃	岡部 一郎 (朝日新聞印刷局長)
〃	平岡 敏男 (毎日新聞論説委員、弘前、昭7・経・経済)
〃	殿本 圭一 (共同通信社整理部長)
監事	佐々木道雄 (東大経教授)
〃	奥山 信一 (ゴム工業専務理事)
評議員	矢内原忠雄 (東大経教授)
〃	亀山 直人 (東大工学部長)
〃	星合 正治 (東大二工教授)
〃	東畑 精一 (東大農教授)
〃	伊藤 好道 (社会主義経済研究所)
〃	久富 達夫 (出版共同助成会常任顧問)
〃	増田 寿郎 (朝日新聞社会部次長、静岡、昭6・法・法律)
〃	高松棟一郎 (毎日新聞渉外部副部長、水戸、昭9・文・独文)
〃	椎野 力 (朝日新聞社会部次長)
〃	沢開 進 (毎日新聞政治部)
〃	末弘巖太郎 (中央労働委員)

〃 小野 秀雄（東大講師）

事務長は明石功、編集長は長谷川泉であり、編集部員には、大学新聞時代の学生のうち、加藤、井出、石島、春田、鈴木、金原、宮本、太田、小川になり、他の学生はそれぞれの出身グループのレポーターとして協力することになる。更に再刊後、編集部員に応募して採用され、九月までに実質的に編集部に参加した者は、仲尾和雄（二高、昭24・文・社会）、川上幸一（三高、昭20・京大・理、昭24・経・経済）、高橋豊（四高、昭22・工・船舶）、田辺員人（三高、昭24・工・建築）、小山田昭男（東京、昭24・理）、長坂聡（府立、昭23・経・経済）、河内光治（松山、昭24・文・国文）、青山富士夫（松江、昭24・文・国史）、阿部陽三（陸経、昭24・文・心理）である。長谷川は、これらの者に、原稿依頼、取材、整理、大組までの編集作業を初歩から教え、分担させて編集体制を整えて行くのであるが、それが軌道に乗るのは九月末のこと、それまでは、編集上のこまごました実務は長谷川の肩に重くかかっていた。

五月一日、再刊第一号、通算九百八十四号は四頁で発行される。一面下二段に活字を大きくして「再刊の辞」が載っている。先ず、その全文を掲げよう。

大正九年十二月学生の手によって生れ出でから、昭和十九年五月当時の軍国主義超国家主義的風潮と官僚統制の強圧により発行停止を余儀なくされるまで、約二十五年間、帝国大学新聞は、日本の若いジェネレーションの民主戦線の一翼として、進歩的学生の

牙城であった、それは常に祖国の繁栄が帝国主義侵略戦争の虚偽と抑圧の途ではなく、人民の生活の向上と安定、自由と真理の途にあることを確信して闘った新人会などの学生運動と共に生長して来た、それはあの暗黒の時代にあっても批判的精神と科学的見透しを失わなかった少数の人々の伝統を受け継いで来ている、帝国大学新聞は、この故に、ひとり東大六千の学生ばかりでなく、全国の学生、知識人によって支持され、或いはその横断的連絡機関として、あるいはその前衛たる役割を果たして来たのである

今ここに二年の休眠の後に再生した帝国大学新聞の任務は、先ず第一にこの進歩的伝統の正しい継承者として、学生の立場から現在進行しつつある民主主義革命の積極的推進力たることである、我々は先人が苦闘し求め来った民主主義への途を敗戦によって与えられた、しかし窮乏と荒廃の中より祖国を再建するのはこの途以外にない事を知る時、我々は虚脱より立ち上ってこれを闘いなければならない、そして真理と自由を愛する青年学徒はその先頭に立つべきではなからうか

第二に帝国大学新聞は学生を現に立ち上りつつある広汎な人民大衆と結びつける一つの紐帯となり、余りにも静寂な象牙の塔と、闘争し前進する現実社会との通風孔とならなければならぬ、蓋し真理は単に静かな書齋で学ばれるというよりも、現実の社会生活の中に真実の姿を現わし、その中に於てのみ結実するからである

帝国大学新聞はこの為には、読者諸兄、殊に学生諸君の支持と援助とを必要としている、諸君はあらゆる問題について考え、討論し、その成果を寄せられる事を希望する、かくしてのみ帝国大学新聞は学生の新聞としてのその任務を遂行する事が出来るであらう

再刊に当って我々の決意と読者諸兄の支持を切望してやまない

帝国大学新聞社編輯部

これは井手が書き長谷川が整理したものである。論説は「大学を興すもの」と題され、嘗つて「国家の須要ニ応ズ」べく創設された帝国大学は、敗戦後の日本再建の主導的地位に立つことは不可能であるとして、新しい学問の確立、新しい大学の発足を主張して、次のように書く。

固より、大学の運命は、根底に於ては、社会革命の帰趨に規定せられるであらう。然しながら、否むしろ、それ故にこそ、特に、革命に於ける進歩的学者、学生の実践こそが大学をその顛落より救う最大の力となり得るのである。それら前衛的文化人の自覚と決断とが要望せられる、進歩的学生大衆又速かに結束せねばならない、そこに於ては、政治的社会的経済的民主主義の実現が我らの共同目標となるであらう。然し、特にその実現を阻む諸々の旧觀念、旧文化要素に対する徹底的な文化闘争、理論闘争が我らの共同課題とならなければならないのである。そして民主主義社会

廃墟の中の原点（河内光治）

建設の全社会闘争と密接に結びついたこの闘争の中からのみ新しき文化、新しき学問は生れ出る。かくして生れ出でた新しき文化は、人民大衆の生活に根ざした健康な非有閑的な文化であり、新しき学問は、生産と固く結びついた、生産を促進する、真に人民のための学問でなければならない。

そして正にそれ故に、それは、人民と共に闘い、人民の先頭に立つ進歩的文化人の手によって戦い取らるべきものである。

ここに「大学の使命」があり、ここにのみ「大学の理想」と言わねばならない。

旧き大学は顛落する。その廃墟の上に、新しき、「無形の」大学を興す者は誰か。

これは桜井の執筆である。そしてその下には、「学生運動の現段階と方向」を日本共産党袴田里見氏に聞くという六段の囲み記事があり、「労農大衆とむすべ」と見出しがつけられてある。ここから始まる戦後帝大新聞について、以下、時代を追って問題別に検討することにしよう。

（未完）

註 引文文その他、当用漢字、新仮名遣いに、聯は連に、改めました。

昭和五十八年十月五日受理